

ハリス先生をお訪ねしたときのこと

田中都慈子

は、電話のかけ方からバスのターミナルの場所まで詳しく説明したお手紙をいただいた。

この夏は、何年来念願にしていたアメリカ旅行ついに実現することができた。七月三十日に出発し、八月二十三日に帰国する。「二十五日間アメリカ横断バスの旅」に参加し、往きは、東京―ニューヨーク間と帰途サンフランシスコ―ヨセミテ国立公園―ロスアンジュルス―東京間をそのグループの一員として渡米した。

れ、十月から翌年三月まで日本で過ぎたハリス先生（ペンシルベニア州立大学教授）にまたお目にかかることと、先生のお友だちでやはり同じ大学の教授であるド・リソボイ先生にもお会いすること。ド・リソボイ先生は、私が以前にロンドンに行った時、先生も丁度研究のためロンドンにいらしていて、ゴールドズグリーンのお宅に伺ったことがあり、是非お会いしたかった。そして出来れば、カナダまで足をのばし、今は農場をやっているカナダ人と結婚した友だちや、トロントで幼稚園につとめている友だちにも会ってこようと考えた。幸いに、突然に連絡したのに心よいお返事をいただくことが出来、ハリス先生から

ニューヨークについた次の朝、なんとか無事にピッツバーグ行きに乗りこみ、八時間のバスの旅の末、夕方四時頃にステートカレッジのバスターミナルに着いた。ミセス・ハリスが迎えに来て下さり、車で先生のお宅にたどり着いた時には、心底ほっとした。大学を右手に、左手にゴルフ場の緑を見る、その辺一帯は閑静な住宅地である。建物の前は通りに面して芝生と、丈の低い木が植えられ、建物の奥には広い庭がついている。先生のお宅は、国道から少し入った静かなところで、そこに一週間半近くおじゃました。

丁度、大学の授業を終えて帰られた先生にお会いし、夕食をいただく。ペンシルベニア大学は、一年が四期に分かれているために夏も講義があつて単位をとることがで

きる。これからをどう過すか、先生のご予定を伺う。夜、窓からチェリートクーの大木のみえるベツトに入りながら、ここにこちややってきているのが夢のようだった。

次の日は土曜日で、先生は、こどものための本だけ売っている本屋さんにつれていってくださった。楽しい本や可愛いカードがたくさんあったのですっかり時間をオーバーしてしまった。その店は、大学の向いの通りにあり、一帯にのんびりしたいなかな町といった感じで、こじんまりと楽し気だった。

その日の夕食は庭でたどんをつかってバーベキュー料理をしてくださった。その上その晩は、八時から大学構内で行われるバレーを観に行くという。大急ぎで着がえをして車で出かけた。開幕まで時間があり、あたりのようすをみていたら、あまりにいろいろな服装にすっかりおもしろくなってしまい、ハリス先生に言ったら、普段控え

目でしゃべらないミセス・ハリスも目を輝かせて「あんなかつこうをして」とか「ねえ、あの人見た？ 通りの向うの人よ」などと話しているのにおかしくなってしまう。私はお二人にはさまれて、はじまる前から楽しい気分を味わった。裸足で、背中

は丸あき、スカートは床までのインディアン風、ヒッピー風から、超ミニとジーンズのダブル、ブラックタイにタキシード、ロングドレスのお年寄りのダブルなど、それぞれが口々にしゃべりにぎやかなことであった。バレーは、クラシックなものから、コミックなもの、そしてモダンなものまで、とてもスピーディーでおもしろかった。

お皿をふいてくださる。ミセス・ハリスは「アイスクリームを食べよう」とこどものようにいう先生をみながらバーベミンとチョコレートのアイスクリューを盛ってき

日曜日は、いつもより二時間遅く九時に朝食というので、朝、時間まで露のおりた庭を歩く。ロビンが遊びに来ていた。朝食後、家の近くのゴルフ場からみえる平らな山並みのタッシーマウンテンまで一時間のドライブに行く。夏の花が終わり、秋の花が咲く前で、花のない時期だそうだ。ペンシルベニア州の花ワイルドローレル（しゃくなげの一種）がたくさんあり、「花は、帰ってからみせてあげる」といわれる。山は州の所有になっていて、勝手に木を切ったり、家を建てたり出来ないことになっていそうだ。車をとめてブルーベリーの実を摘んでいる人たちにも会った。キ

キャンプをしたり、人造の湖で泳いだり、釣をしている人々もいる、木のおいと静けさがあたりをおおっていた。

午後にペンシルベニア大学の大学院に留学中の大戸美也子さんがみえることになっているという。大戸さんは、ハリス先生のお宅に一年半いらして今は学生寮にいらっしゃるそうだ。先生は、それまでガレージの掃除をするといわれて、まるでジャングルの中の戦闘服のような緑と茶のぶちの作業服を着て庭に消えた。私はバスルームの掃除にとりかかった。後でわかったことが、毎週木曜日にミセス・ギャラガーが掃除をしに来てくれることになっているのでミセス・ハリスは完全に掃除から解放され、その時間を本を読んだり、手紙をかくのにあてていらした。

掃除を終えて居間においていくと、アメリカ北部の花の本の、しゃくなげのところが開いていた。私の知りたいもの、興味の

ありそうな本が、絶えず入れかえられて居間の机の上におかれていた。その発見は、私にとって最大の楽しみであり、その無言のおもてなしに感激した。たくさんの鳥、花、新しい本に、毎日会うことができたのである。

昼食にみえた大戸さんと一緒に、近くに住んでいるアーミッシュの話に興味深く伺う。十八世紀に、スイス、ドイツ、アルザスからやってきた人々で、今も、電気、ガス、水道のない当時のままの生活を続け、馬車をのりものとして彼ら独自で暮している。家も共同で建て、宗教も教育も彼らだけで行なっているという。写真など見せていただく。

その午後いっぱいは大戸さんの案内で、学生寮、図書館などみて回り、あまりの規模の大きさにびっくりする。キャンパスの芝生の上をりすや、りすに似たねずみらしきものが急いで穴に入ったり、木の中の巣

に入りこむのを見る。鹿が庭に入ってくるころもあるそうだ。

先生の家は、高台の端で、ずっと道は下り、裏の方は、低い盆地のようになり、小屋のような家が、ポツンポツンと立ち、洗たくものがつなにはためいていた。牧場のようなさくがずっと続いている。野の花が咲き乱れ、国道は果てしなく続いている。

次の日、朝五時にハリス先生のつくってくださったトーストとコーヒーをいただき、夜明け前の暗さの中をフィリップスバードの飛行場まで送っていただく。

その後、友だちのいるモントリオール、オタワ、トロントを回り、ワシントンに住むハリス先生の娘さん夫婦のところによって、また先生のお宅に帰ってくる。

旅の話に花が咲く。夕食の時にナイアガラ滝のところでみつけた小さな茶色の陶器のあひるのおみやげをそっとテーブルの

上に出したら「ナイアガラにあひるか」とおっしゃって大笑い。次の日、電話の隣りに置かれていた。

翌朝は、ナースリースクールを見学に先生がつれていってください。そこは、この町ではじめて出来たナースリーであった。

夜は、パーティに、ド・リンボイ先生夫妻、二世のフクヤマ先生夫妻、大戸さんをよくくださった。庭でにぎやかに食事をする。暗くなって、ほたるがまるで火花のように細い線となっては消える。へやの中に入り、夜遅くまで、すもう、鳥、英語、盆栽などの話に熱中する。

その次の日は、大戸さんも一緒にみんなでベルビルまで、アーミッシュの毎週水曜日のせり市をみに行く。付近の人々が大ぜい集まっていた。食料品の値段をせり上げたり、下げたりおもしろい。会場の外にも鍛冶屋の道具から、なべ、かま、アクセサリー、トマトパイ、衣類までなんでも売っ

ている。

午後、町に用のあるミセス・ハリスと一緒に大学の構内をぬけて行く。あんなにたくさんの本をもっていらっしやるのに一週間に一回必ず図書館に本を借りにいらっしやるそう。その日は、めざす本がなく、一階のこどもたちの本のコーナーをゆっくりと見て回った。

夕方、ものすごい雷雨になり、街路樹の枝が折れたりした。大戸さんが夕食によんでくださったので、雨の中を学生寮に出かけ、大学の授業について話を伺い、学生食堂で食事をする。いろいろな国の人に会う。

ステートカレッジをたつ前の日、ド・リンボイ先生が、朝迎えに来てくださり昼食をお宅によんでくださった。庭先が森になつているすてきなところだった。午後、ド・リンボイ先生の大学院の授業に出させていただきます。

とうとうお別れの日が来てしまった。出

発の時刻には、またもやすごい吹きぶりになつてしまい、その中をミセス・ハリスの運転で、フィリップスバーグに向う。飛行場は雨が上っていた。お別れするのが本当につらく、おなごり惜しかった。

(お茶の水女子大学)

